佐久市埋蔵文化財調査報告書　第183集

野馬窪遺跡群　野馬窪遺跡Ⅳ

長野県佐久市野馬窪遺跡Ⅳ発掘調査報告書

2010.10

小須田　雄二
佐久市教育委員会

例　言

1　本書は野馬窪遺跡群　野馬窪遺跡Ⅳの発掘調査報告書である。
2　調査主体者　佐久市中込3056　佐久市教育委員会　教育長
3　遺跡名及び発掘調査所在地　　野馬窪遺跡群　野馬窪遺跡Ⅳ（ＳＮＫⅣ）
　　佐久市猿久保字野馬窪233-1
4　調査担当者　出澤　力
5　本書の編集・執筆　出澤　力
6　本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡　例

1　遺構の略称は以下の通りである。
　Ｍ－溝跡　　Ｄ－土坑　　Ｐ－ピット
2　スクリーントーンの表示は以下の通りである。

　遺構－地山断面

3　挿図の縮尺は以下の通りである。
　遺構－溝状遺構・土坑　　1/80
4　遺構の標高は各遺構ごとに統一し、水糸高を標高とした。
5　調査グリッドは小グリッド4×4m、大グリッド40×40mである。

目　次

例言・凡例・目次

第Ⅰ章　発掘調査の経緯 …… 1
　1．立地と経過 …… 1
　2．調査体制 …… 1
　3．遺跡の概要 …… 2
第Ⅱ章　遺跡の環境 …… 2
第Ⅲ章　遺構と遺物 …… 2
　1．溝状遺構 …… 2
　2．土　　坑 …… 4
第Ⅳ章　まとめ …… 5

写真図版

抄　　録

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　立地と経過

野馬窪遺跡Ⅳは佐久市猿久保地籍に所在し、標高は695m内外を測る。遺跡は北西側に湯川を望む火山性の台地上に立地し、また現在は埋没しているが、東側には「田切り」と呼ばれる帯状の低地が縦断している。対象地は湯川と田切に挟まれた台地上の、急速に南側に向かって傾斜していく傾斜地にあたる。

今回開発に伴い事前に試掘調査が実施された。その結果、遺構が確認されたため対象地内で遺跡の破壊が懸念される建物建設予定範囲において、遺跡の記録保存を目的とした発掘調査が行われることとなった。

第１図　野馬窪遺跡Ⅳ位置図（１：5,000）

第２節　調査体制

調査受託者	佐久市教育委員会	教育長　土屋　盛夫			
事　務　局	社会教育部長	工藤　秀康			
	文化財課長	森角　吉晴			
	文化財調査係長	三石　宗一			
	文化財調査係	林　幸彦	並木　節子	須藤　隆司	小林　眞寿
		羽毛田卓也	冨沢　一明	上原　学	井出　泰章
		出澤　力			
	調査主任	佐々木宗昭	森泉かよ子		
	調査担当者	出澤　力			
	調査員	浅沼　勝男	岩松　茂年	菊池　喜重	小林　千勝
		坂井　一夫	羽毛田利明	岡村千代美	小林百合子
		細萱ミスズ			

第３節　遺跡の概要

遺　跡　名	野馬窪遺跡群　野馬窪遺跡Ⅳ（ＳＮＫⅣ）
所　在　地	佐久市猿久保字野馬窪233-1
調査期間	平成22年４月19日　～　平成22年４月23日（現場）
	平成22年４月26日　～　平成22年10月30日（整理）
調査面積	９０㎡
調査遺構	溝状遺構　１条　　土坑１基
調査遺物	陶器（常滑・甕）　獣骨（馬）

第Ⅱ章　遺跡の環境

野馬窪遺跡周辺は古代・中世の間、文字に記された歴史上にはその姿を現すことはなく、当時の文献からだと江戸時代に初めてその名前を見ることが出来る。考古学から知ることが出来る野馬窪遺跡群周辺の歴史は縄文時代から始まり、縄文時代中期後半のものとされる土器片が野馬窪遺跡群内で発見されている。生活の痕跡である住居址が確認されるのは弥生時代後期からで、間を空けて平安時代には遺跡群北西の湯川に近い地域で規模の大きな集落が確認されている。

今回調査した対象地の北側では平成20年度に野馬窪遺跡Ⅱ・Ⅲが、約7,000㎡の範囲で発掘調査された。そこからは中世のそこに存在した館を区画する溝が確認されており、今回の調査で見つかった溝状遺構も、区画溝に関係する溝として作られたものと考えられる。また、対象地から南西側にある番屋前遺跡でも中世の集落跡が調査されており、この地域に中世の集落址が展開していたことを知ることが出来る。

なお、今回調査は地表の耕作土を20㎝～50㎝程度除去した明黄褐色(10yr7/6)ローム層上を遺構確認面として調査を行っている。遺跡の基本層序については、溝状遺構のセクション図を参照されたい。

第Ⅲ章　遺構と遺物

第１節　溝状遺構

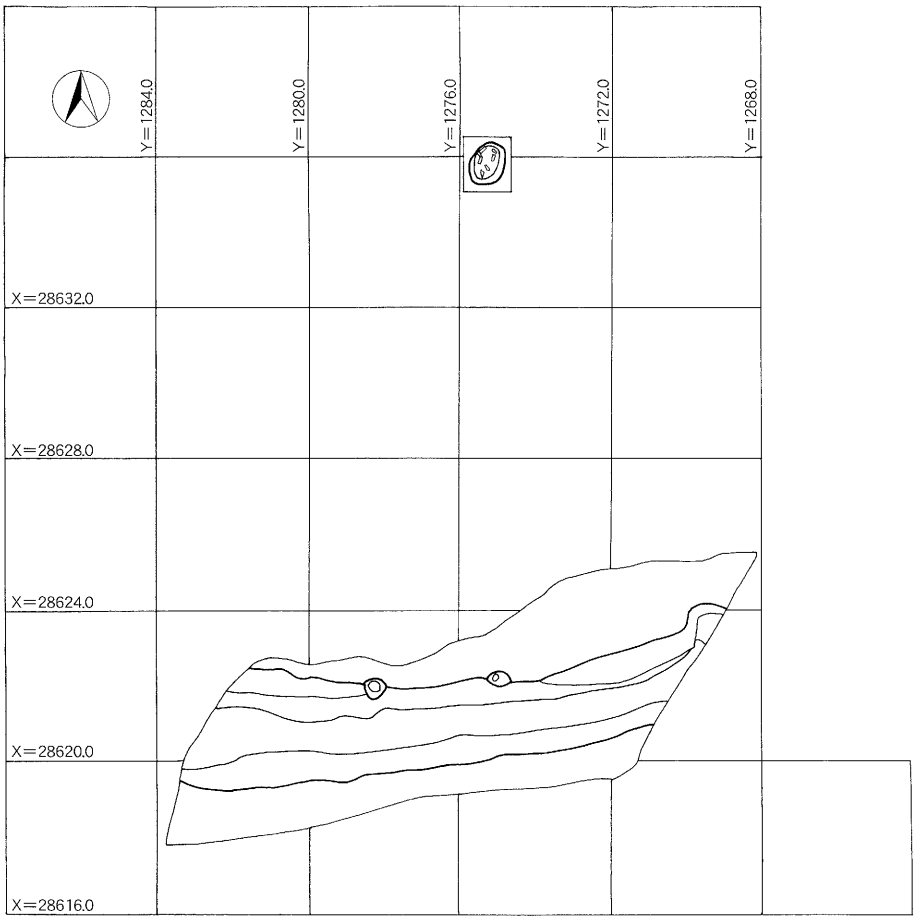
１）Ｍ１号溝状遺構

今回の調査では１条の溝状遺構が確認された。Ｍ１号溝状遺構は、調査によって確認された範囲で東西の長さ12.7m、南北幅は一番広い西端で3.4m、中央で2.2mを測る。最も深いところで深さは72㎝であった。

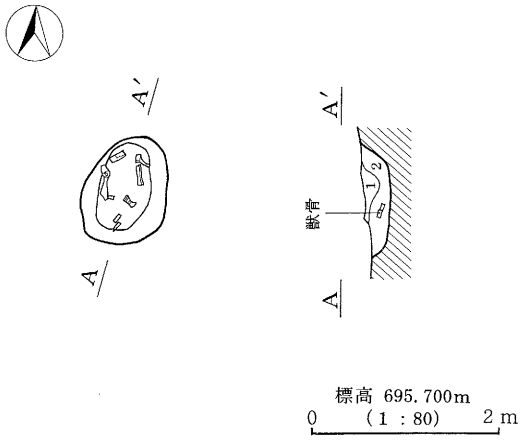
ほぼ東西を横断する形で溝は走っており、確認した東側でわずかに北に曲がっている。溝の断面形状はなだらかで底面は平坦である。東側の一部では落ち込みの角度が急になる。溝に堆積した覆土は自然体積の様相を示し、底面に近い部分には地山を含むきめの細かいシルト質土が堆積している。

野馬窪遺跡Ⅱ・Ⅲの発掘調査で確認された区画溝とその形状、溝の走る方向が、今回確認されたＭ１号溝状遺構は類似している。したがって、前回調査で確認された溝のさらに外周を回る区画溝である可能性がある。

溝状遺構の中で確認された遺物は常滑産のものと思われる甕の胴部と想われる破片１点と、土師質の薄く細かな土器片１点である。常滑については中世のものと考えられるが、破片での出土のため詳細な所産時期は明らかにはならず、溝状遺構がいつの時代のものであるかも不明である。



第２図　　野馬窪遺跡Ⅳ全体図（１：200）



Ｄ１　土層説明

１層　にぶい黄褐色土(10yr4/3)　パミス、軽石含む。
２層　褐色土(10yr4/4)　上層土ブロックを多量に混入。
骨片を多く含む。

第３図　Ｄ１号土坑実測図

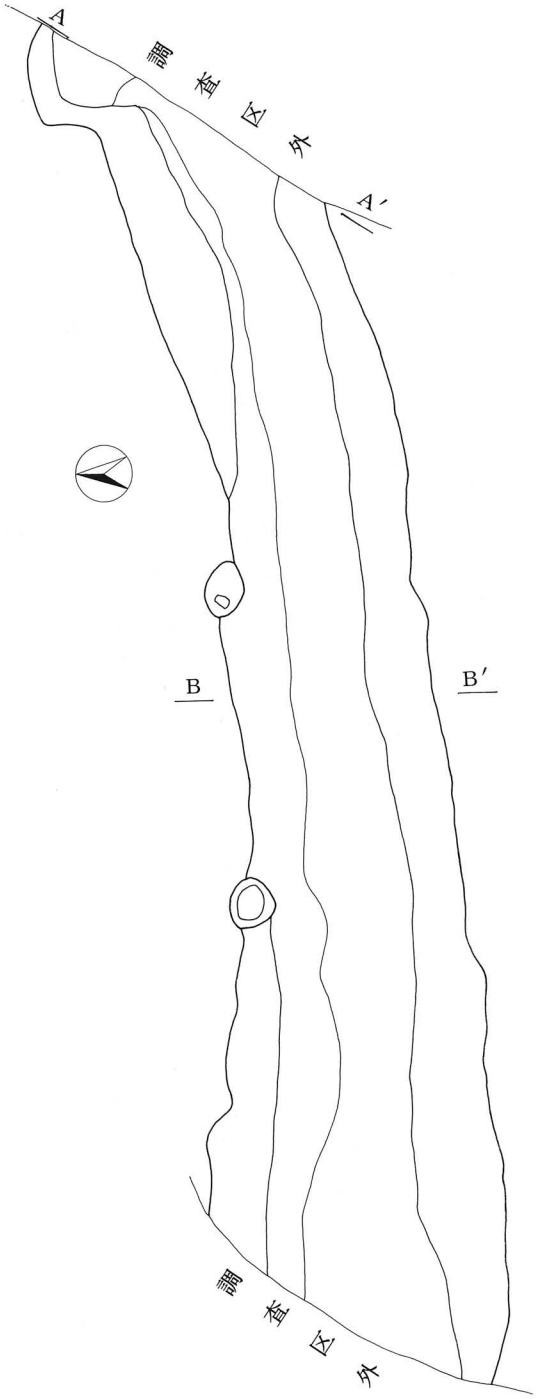
第２節　土坑

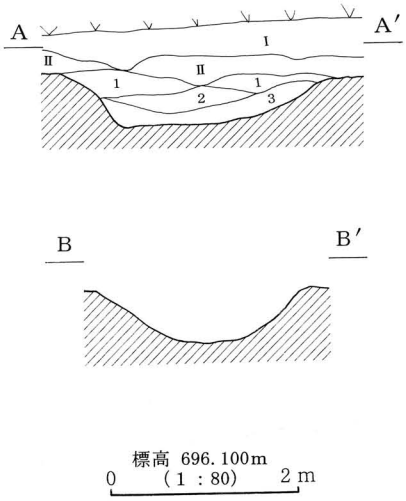
１）Ｄ１号土坑

１基の土坑が確認された。Ｄ１号土坑は、南北長116cm、東西長88cmを測り、深さは28cmである。土坑の長軸方位はＮ－10°－Ｅでわずか東に傾く楕円形である。

土坑内には馬のものと思われる獣骨が確認された。獣骨は臼歯と大腿骨を含む足の骨であると思われ、骨の出土状況から頭を南側に向け土葬により埋葬されたものと考えられる。

獣骨以外の遺物の出土は認められず、土坑の所産年代は不明であるが、南側に存在する中世の集落址に関係するものである可能性は高い。

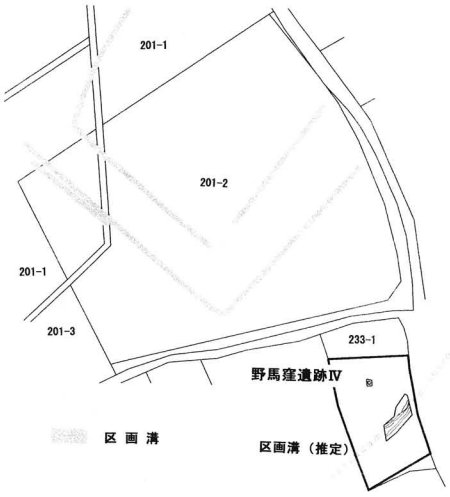




Ｍ１　土層説明

Ⅰ層　暗褐色土(10yr3/4)　耕作土。
Ⅱ層　暗褐色土(10yr3/3)　耕作土。

１層　黒褐色土(10yr2/3)　パミス、軽石を微量含む。
２層　暗褐色土(10yr3/3)　パミス、軽石を含み、地山ローム粒が混入する。
３層　褐色土(10yr4/6)　シルト質土。軽石を多く含み、上層暗褐色土ブロックを多く混入する。



第４図　Ｍ１号溝状遺構

第Ⅳ章　まとめ

今回の調査によって明らかとなったのは、中世の居館の周囲を区画する溝状遺構の一部分と、その内側に埋葬された馬の土坑墓であった。

溝状遺構については、野馬窪遺跡Ⅱ・Ⅲの発掘調査で確認された区画溝と比べてみてもその溝の規模、溝が走る方向と角度は極めて近似しており、同様の性質を持つものと見て間違いはない。

本調査に先立って行われた試掘調査ではこれら以外の遺構は確認されておらず、地形的にも今回調査された地点は台地から南側に向かい傾斜していく傾斜地上にあたり、台地上に展開する中世の居館、集落の範囲としても南側の縁辺部に当たるのではなかろうか。

写真図版

Ｍ１号溝状遺構（西から）

Ｄ１号土坑獣骨出土状況（南から）

Ｄ１号土坑（南から）

Ｍ１号溝状遺構出土遺物（１：４）

報告書抄録

書名	野馬窪遺跡群　野馬窪遺跡Ⅳ
ふりがな	のまくぼいせきぐん　のまくぼいせきよん
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第１８３集
編著者名	出澤　力
編集・発行機関	佐久市教育委員会
発行年月日	2010.10.29
郵便番号	385－0066
電話番号	0267－68－7321
住所	長野県佐久市志賀５９５３
遺跡名	野馬窪遺跡群　野馬窪遺跡Ⅳ（SNKⅣ）
遺跡所在地	佐久市猿久保字野馬窪233－1
遺跡番号	１２２
経度	３６°－１５′－５９″
緯度	１３８°－２９′－８″
調査期間	2010.4.19～2010.4.23（現場） 2010.4.26～2010.10.30（整理）
調査面積	９０㎡
調査原因	集合住宅
種別	集落跡
主な時代	中世
遺跡の概要	遺構　溝状遺構（中世）　土坑（中世） 遺物　土器（中世）　獣骨（馬）
特記事項	中世の居館址を区画する区画溝の一部が確認された。

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第183集

野馬窪遺跡群　野馬窪遺跡Ⅳ

編集・発行　佐久市教育委員会
〒385-8501 長野県佐久市中込3056
文化財課
〒385-0006 長野県佐久市志賀5953
TEL 0267-68-7321
印刷所　キクハラインク有限会社